

親鸞的教育

北 畠 知 量

はじめに

ヤスパースは『大学の理念』⁽¹⁾の中で、歴史的社会的諸条件を捨象した教育の基本形式を想定した。それは、スコラ的教育、師匠による（マイスター的）教育、ソクラテス的教育の三つである。

これらの教育において、教育の目的、教師の役割、教材、教師の権威はそれぞれ異なった姿のものとなる。

□ スコラ的教育の目的は、伝統的な権威ある教材の伝達である。教師は、教材の伝達者であって、創造的な研究者ではない。だからこの教師は、容易に他の誰かに取って代わることが出来る。

□ 師匠による教育の目的は、人格的陶冶である。教師はカリスマ的性格を有する。この教師は、弟子たちから尊敬さ

れ、愛され、崇拜されている。彼の為した事、語ったことの全てが意味のある教材となる。教師は、絶大な權威を有するかけがえのない存在で、他の誰かに取って代わることはできない。

□ ソクラテスの教育の目的は、知を愛し求めることである。教師は、無知を自覚する愛知者という意味で、生徒と同じ立場に立っている。そこには固定的な教材はなく、ともに学ぶ姿があるだけである。教育者の役割は、助産的で、生徒の内にある諸々の可能性が目覚めていくことが重要だとされる。

さて、これら三つの教育の基本形式を念頭において親鸞を見たとき、親鸞が為した布教は、三つのいずれにも当てはまらないオリジナルな教育の一形式として浮上する。

本稿は、教育の目的、教師の役割、教材、教師の權威という四つの教育的視点から、親鸞の布教を考察し、これは、ヤスパースが想定しなかった教育の一形式であり、それは親鸞的教育と呼ばれうるものである事を示そうとしたものである。

親鸞的教育の目的

親鸞の布教は、『無量寿経』に依拠してなされた。

釈尊の説いた『無量寿経』によると、はるか昔に法蔵菩薩は四十八の願を建て、極楽浄土を建設しようとした。法蔵は、その第十八願で、念仏する衆生を撰取して極楽浄土に往生させることを誓った。また十一願で、その浄土に往生し

た菩薩は、最終的には必ず滅度に到らせると誓った。法蔵は、これらの願を成就して阿弥陀仏となった。

阿弥陀仏のこれらの願行によって、我々は信を賜り、極楽浄土に往生・成仏する。弥陀が、我々に信を与え、我々を往生・成仏させるのである。そのために必要なのは、縁であるが、ある出来事を縁と受け止める知恵を与えるのもまた、弥陀であるとされている。つまり、我々が往生・成仏する全過程は、ことごとく弥陀の他力によって遂行されるのである。⁽¹⁾

親鸞は、『無量寿経』をこのように了解した。この教えは、世々の高僧たちによって受け継がれ、法然を介してようやく親鸞に届いた。そして今、この親鸞を介して、学生たちに伝えられようとしている。親鸞はそんな地点に立っている。親鸞は言う。

「弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず。仏説まことにおわしまさば、善導の御釈、虚言したまうべからず。善導の御釈まことならば、法然のおおせそらごとならんや。法然のおおせまことならば、親鸞がもうすむね、またもって、むなしかるべからずさうろうか。詮ずるところ、愚身の信心におきてはかくのごとし。このうえは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからい（決意次第）なりと云々」⁽²⁾

ここで局面は二つ分かれる。

(1) 弥陀が願を建て、これを行ずる局面。

弥陀は本願を建て、教行信証を回向して、我々を浄土に往生させようとしている。その際、ソクラテスの教師であれば、弥陀の助手となり、弥陀の仕事の一端を担うことがある。また、師匠（マイスター）や祖師たちは、弥陀の威光を受け、弥陀に等しき者に成り代わることがある。けれども親鸞の教師は、学生と共に、どこまでも凡夫という地平に立ち、弥陀の他力の願行に我が身をゆだねるばかりであって、弥陀の願行を代行することはない。

(2) 弥陀の教法を説くという局面。

弥陀の教法を説く。その目的は、「念仏をとりて信じたてまつらん」機を育てることにある。教師は、自分もまたそんな機として育つことを目的に、弥陀如来の教法を学生に説くのである。

この布教について、蓮如は次のように伝えている。

故聖人のおおせには、「親鸞は弟子一人ももたず」……「そのゆえは、如来の教法を、十方衆生にとききかしむるときは、ただ如来の御代官をもうしつるばかりなり。さらに親鸞めずらしき法をもひろめず、如来の教法をわれも信じ、ひとにもおしえきかしむるばかりなり。そのほかは、なにをおしえて弟子といわんぞ」とおおせられつるなり。⁽⁶⁾

「如来の御代官」というのは、如来の救済の代行者ということではなく、教法を説く代行者という意味である。念仏させ往生させて人を救うのは、弥陀如来の仕事である。この救済の教法を、凡夫の一人である親鸞は、自らも信じ、人にも「説き聞かせ」「教え聞かせる」だけの者だというのである。

親鸞的教師は、共に、浄土に往生する機として育つことを願って弥陀の教法を説く。だから機として育つことが、親鸞的教育の目的となる。

教師の役割

共に浄土往生の機として育つために、教師は一体どのような役割を果たすべきなのであろうか。

親鸞は自分を省みて、自分の機は、三願を転入したと回想している。これは、十九願の自力往生の機が、二十願の機、さらに十八願の他力往生の機になったということである。けれども、全ての機がこのような段階を経る必要は無い。布教の結果、学生が十八願の機として純熟すればよい。だから、そうなるように学生に働きかけること、これが教師の役割となる。

以下、これらの三機を現代の言葉で置き換え、各々の機に対して、教師がどのような働きかけをするのかを考えてみる。

(1) 十九願の機…これは、諸々の功德を修して往生を願う自力往生の機であり、方便仮土（観經の浄土、懈慢界）へ往生すると説明されてきた。

この機の学生は、現代風に言えば、自我の願いの実現、つまり自己実現が、人生の理想だと思い、生きがいだと思い、救いの世界であると考えている。

この機の学生に対して教師は、自己実現の努力を認めながらも、臨機応変に教法を説くことになる。具体的に言うくと、教師は学生に対して、自我に対する信頼はいともろいものである事の自覚をせまり、自我を満たす道は満足を得ることの無い道であることの自覚を促し、自我を越える生き方があるという教法を、様々に説くことになる。

(2) 二十願の機…これは、名号を聞き、諸々の徳本を植えて往生を願う機であり、浄土に往生するが、そこは疑城胎宮（仮土の一種）であると説明されてきた。

この機の学生は、現代風に言えば、自我をある程度は満たしながらも、そこに矛盾や限界を感じ、自我を越えたもの（例えば国家、社会問題、医療、福祉、学問、芸術など）に献身することで、より大きな安心を得ようとしている。

ところが、長くその献身を続けていくと、学生の多くは、献身することに疑問を感じ始め、自力で自我を、心底から充足させることの限界を自覚し始める。

この機の学生に対して教師は、そのような献身で得られる安心は、独り善がりの安心の姿であって、献身する自分そのものを超えるような生き方こそが、本当の安心の世界へ到る道であるという教法を説くことになる。

(3) 十八願の機…これは、念仏して往生を願う機であり、真実報土へ往生すると説明されてきた。

この機の学生は、現代風に言えば、もはや自己実現に幻想を抱かず、自我を超えた世界こそが安心の世界であると感じている。

この機の学生に対して教師は、どこまでも払拭できない自我の執着心を自他共に嘆きながら、互いに教法を確かめ合い、他力の発現を待つことになる。

以上の三つの機の学生は、いずれも凡夫の立場に立っている。教師もまた、凡夫という立場に立っている。けれども教師は、これらの学生の言動に接したとき、瞬時に、学生よりも高いレベルの機に立てる。これが教師としての役割を果たしうるための基本条件である。

そのことを『歎異抄』の親鸞は、次のように述べている。

「浄土の慈悲というのは、念仏していそぎ仏になりて、大慈大悲心をもって、おもうがごとく衆生を利益するをいふべきなり」

「ただ自力をすてていそぎ浄土のさとりをひらきなば、……神通方便をもってまず有縁を度すべきなりと云々」⁽⁸⁾

教師は「ただ自力をすて」「いそぎ浄土のさとりをひらき」「念仏していそぎ仏になる」こと、つまり自らが「いそぎ」助かることで、弥陀の救済の教法を学生に示すのである。

かつて善導は、この仕事を「自信教人信」と原理化した。

善導は誦して言う。

「みづから信じ人を教えて信せしむること、難きがなかにうたたささらに難し。大悲をもって伝えてあまねく化するは、まことに仏恩を報ずるになる。願わくはもろもろの衆生とともに、安楽国に往生せん。」⁽⁹⁾

善導は、「自信教人信」は難であるから、この本願念仏の教えを、弥陀の大悲をもって人々に伝え、人々を教化

することが、私の恩を報ずることになるのだと指摘する。この場合、「伝えてあまねく化する」という点に、教師の役割が示されている。

親鸞は、「自信教人信」という言葉を一度も用いていない。この言葉は、自信と教人信の二語からなるが、いずれの語にも、自力の要素が付きまとうからであろう。けれども、「みずから信を得る事が、即、人に信を教えることになる」と意だと解すれば、自信教人信は、親鸞的教師の姿を、端的に示している。

親鸞的教師は、捨てきれない自我の執着心を凝視しながら、ただ弥陀の教法を説き、これにそった生き様を「いそぎ」示すことで、学生の機が熟し、学生に信が獲得されるのを待ちわびる。

しかし、たとえその時が来たとしても、学生が、念仏をとって信ずるか否かは、「面々の御はからい（決意次第）」であって、教育者の責任ではない。この教師は、教育の成果に関しては頓着せず、責任も負わないのである。

教材

弥陀は、その願行によって、念仏する者を浄土に往生・成仏させる。このことに、直接・間接に言及した全ての経典、論書などが、布教のための親鸞的教育の教材となる。

往生を目指す学生にとっては、これ以外の教材を研究（学問）することは、不必要とされる。また、教材を研究するのであれば、それは、本願の旨を明かすためになされるべきだとされる。

唯円は記している。

「他力真実のむねをあかせるもろもろの聖教は、本願を信じ、念仏をもうさば仏になる（とある）。そのほか、なにの学問かは往生の要なるべきや。まことに、このことわりにまよえらんひとは、いかにもいかにも学問して、本願のむねをしるべきなり。経釈をよみ学すといえども、聖教の本意をこころえざる条、もつとも不便（気の毒）のことなり。」¹⁰

以上を踏まえて言うと、本願を信じて念仏する者を浄土に往生・成仏させる願文、つまり十八・十一願文、ならびにその成就文を頂点として、すべての教材が体系化されることになる。

その体系化の原理は、次のようなものとなる。

(1) 十八・十一願文は、信に基づく念仏によって往生することを約束している。このことを顕示しているのは、『無量寿経』であり、穩に示しているのが『阿弥陀経』『観無量寿経』である。だから、これら三経が正依の教典となる。

三経以外の大乘経典は、独自の教相判釈（二双四重の教判）に従って、分類・体系化されることになる。これが教材体系化の基本原理である。

(2) 信に基づく念仏という見解があるかどうかという視点から、大乘仏教の祖師たちの著作がチェックされる。著作にこの見解が見出されるならば、著作の価値は、一挙に高まり、その著者には、従来とは異なったオリジナルな歴史的位置が与えられる。こうして念仏伝承の歴史が作られる。これが、念仏を伝えた祖師たちの歴史となる。

(3) 三経一論は、全体的に見ると、整合していない部分が多々ある。願文ですらそうである。そこでこれらの文言を、本願他力の視点から独自に読み下すことで終始一貫させ、全体を整合化するという方法がとられる。

(4) 經典の一一の語句は、同じ語句であっても、その意味は歴史的に変容している。例えば「念仏」の意味は、『無量寿経』と、龍樹の『易行品』と、法然の『選択集』とでは、その意味が異なる。その変化の歴史は、末法の機に合わせた仏意の展開であると了解される。こう了解すれば、教材は固定的なものではなく、発展的に解釈できるものとなる。

このような独創的教材了解の作業を親鸞がどう推し進めたかを辿り、さらにその発展を構想する事が教学の研究になる。

けれども、これらの教材を研究(学問)することは、あくまでも信を学問的に裏付け、信を分かりやすい形で人々に説くために必要なのである。

「学問せば、いよいよ如来の御本意をしり、悲願の広大のむねをも存知して、いやしからん身にて往生はいかが、なんとあやぶまんひとにも、本願には善悪淨穢なきおもむきをも、とききせられそうらわばこそ、学生のかいにてもそうらわめ。」⁽¹⁾ s 632

どれだけ教材に通じて、信を得たことにはならない。両者の間には断絶がある。教材は、信を得るためこそある。

学生に求められるのは、信の獲得であるが、それができない学生は、教材＝教学を学問的に研究し、小さな発見を論文に書いて喜ぶという知的ゲームに自己満足する。偽なる教師は、そのような教学の指導に終始する。

教師の権威

親鸞にとって、師である法然の権威は絶対的である。高僧和讃において法然は、カリスマ的な扱いを受けている。けれども親鸞は、自分自身にそのような権威があるとは思っていない。「心は蛇蝎のごとくなり」と懺悔し、「愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して……」⁽¹²⁾と反省を繰り返す親鸞は、自分が凡夫であることを深く自覚するばかりである。

ところが門徒は、そのような親鸞をあがめる。そして門徒は、親鸞に、凡夫の救われた姿を見出す。親鸞は、関東を去って京都に住むが、その親鸞の元に、多くの関東の門徒が、ひとえに往生極楽の道を問い聞かんがために命がけて訪ねてくる。手紙によって、教義上の質問も数多く寄せられる。凡夫親鸞は、権威ある教師なのである。このような親鸞的教師の権威は、いったいどこから生まれるのであろうか。

親鸞的教師は、その人格、経典に関する博識、社会的地位などによって権威を得ているのではなく、教師自身の自己否定（自我否定）という、逆説的事実によって、これを得ている。この自己否定が学生よりも厳しく、機において学生たちにまさることで、教師は教師たり得る。自己否定の結果、他力の信が得られるならば、教師は確かな教師たり得る。

だがその時、教師は、自分が教師であることを否定せざるをえない。

「親鸞は、弟子一人もたずせうろう。」

なぜなら、教師が得たところの信は、その教師が自らの努力で自分を高めたあげくに得た信ではなく、自己否定の結果、弥陀仏から与えられた信だからである。

信を与えられても、教師は凡夫のままである。教師も学生も、凡夫のまま、共に同一の信を弥陀から賜るのである。教師と学生との差は、ただ、この他力の信を先に得たかどうかによっている。この先行性によって、教師は教師たりうるのである。

この先行性が、親鸞的教師の權威の本質である。この点に着目してみると、親鸞的教育の場においては、次のような三種類の權威関係が見出される。

(1) 信を得ていない教師と学生の權威関係

信をえていない者どうしが、制度（組織）上、教師と学生、先輩と後輩の関係になる事がある。勿論その上下関係は、形式的なものであって、実質的な權威を伴わない。両者の間に実質的な權威関係が生まれるのは、一方が先に、他方の機にまさった場合に限られる。

(2) 信を得た教師と得ていない学生との權威関係

学生にとって、先に信を得た教師の権威は絶大である。学生は、教師が有する学識を学び、信の本質に迫りたいと思うが、教師は、自分が権威を有しているとは思っておらず、学生と同一の地平に立っている。そして教師は学生に、「知者遠離」し「愚者になりて往生」すべきことを説くばかりである。

(3) 信を得た者どうしの関係

先に信を得た者が教師と呼ばれるが、両者は、信を一つにする「同心行者」「親友」「同朋」の関係になる。世俗的、制度的な関係上、教師と学生の間になることはあっても、そこには権威関係は生じない。両者にとって権威あるのは、弥陀如来だけである。

※ これ以外に、まれに、信を得た者が、信を得ていない者の僕となることがある。例えば、妙好人が、ただ博学なだけの教学者に仕えるような場合である。

これはまことに奇妙な関係であるが、信を得たものは、この関係にこだわらない。逆に、教学者はこの関係に神経質になる。

機においてまさり、先に信を得たということは、学生にとっては、決定的な意味をもっている。学生は、自らの教学に疑問を抱いた時、この教師の教えを仰ぐことに命を惜しまない。またその教義を学生が誤解したとき、教師は自らの信の有り様を示し、学生を深く歎異することとなる。親鸞的教師は、信を求める学生に対して、教材（教学）から離れるように警告するが、それは信の獲得という根本目標が不明確になるからである。

親鸞的教師の人格、経典に関する博識、社会的地位などは、確かに評価に値するが、それは信を伴う場合に限られる。

信を欠くなら、これらは嘲笑の対象にすらなる。

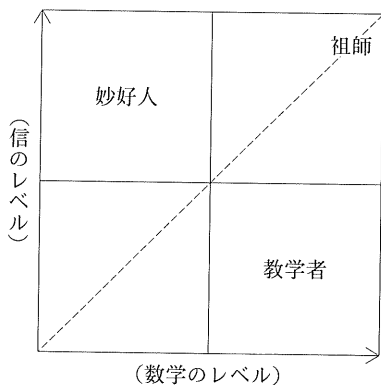
まとめ

親鸞的教育において、教師と学生は、凡夫という同一の地平に立っている。教師とは、機においてまさり、ただ先に信を得た者であるにすぎない。だから教師自身は、自分に権威があるとは思っていない。だがそんな教師は、学生にとっては、なおいっそう大きな権威者である。

教師は、共に浄土に往生できる機として育つ事を目的に、教法を説く。これが教師の役割である。しかし往生そのものに関して、教師は責任を負わない。それは、弥陀の仕事だからである。

往生は、信を得て果たされる。これを学的に証明するのが教法⇨教材である。

それは、十八願「信に基づく念仏によって往生する事ができる」を頂点とした体系であるが、この体系を発展的に解釈することで、教師は新しい時代の教育課題に応えることができる。



- (1) K. Jaspers Die Idee der Universität 森昭訳『大学の理念』理想社
- (2) ここで、念仏して浄土に往生するということの現代的意味を押さえておきたい。人間は自我に執着し、自我に南無(帰依・依拠)しているが、そのことで、自らに苦を背負い込む。苦から逃れたければ、自我に南無せず法に南無すればよい。ところが人間は、どこまでも自我に南無してやまない。
- これを憐れんだ法は、法蔵となり弥陀となり、我に南無せよと人間に呼びかけた。これに答えて人間が弥陀に南無しえた時、この呼応が南無阿弥陀仏(念仏)となる。
- 弥陀の呼びかけに応じて、我々が自我の執着心から解放される時、この呼応の念仏が口をついて出るのである。それが「念仏していそぎ仏になる」という事態である。これによって我々は、浄土という心の世界に往生する。
- (3) 『歎異抄』二章
- (4) Apol. 23b 「……知恵があるとは思えない場合には、神の手助けをして、知者ではないぞということ、明かにしているのです。」
- (5) 善導や法然に関する和讃には、このことが明示されている。
- (6) 蓮如「御文」第一帖一
- (7) 『教行信証(化身土)』大 三五六頁
- (8) 『歎異抄』四・五章
- (9) 善導『往生礼贊』真宗聖教全書 六六一頁 七 六七六
- (10) 『歎異抄』十二章
- (11) 『歎異抄』十二章
- (12) 『教行信証』信卷 大 二五一